

完璧御曹司の結婚命令

プロローグ

里沙が目を覚ますと、背中に人のぬくもりを感じた。ふり向くと裸の男の身体が見えた。もちろん自分も、一糸まとわぬ姿。

胸に、二の腕に……服に隠れる部分には、いくつもの口づけの痕が散っている。

こんな痕を付けたのは、里沙を抱いたまま眠っている青年である。

彼は、横たわる姿すらも完璧だ。やや淡い色合いの艶やかな髪に、引き締まった身体と長い手足。整った顔は、ぐっすり眠っている今も非の打ちどころなく美しい。

彼の名は山嵐光太郎。

里沙の実家である須郷家が、先祖代々お仕えしてきた名門、山嵐家の若き当主様である。

時代劇風に言えば、光太郎と里沙の関係は『お殿様と使用人』だ。

里沙は幼い頃から、両親に『光太郎様に精一杯お尽くしするように』と言われて育った。そして、お尽くしすぎた結果、身体まで捧げてしまったのだ。

今、里沙は、彼に腕枕をされた状況になっている。

——どうしよう、こんな体勢で眠ってしまつて……。光太郎様の腕が痺れてしまう。

慌てて腕枕から頭をずらそうとした里沙は、身動きできずに戸惑う。光太郎のもう一方の腕が、里沙のお腹に回されていたからだ。眠っているとはいえ、男性の腕にしっかり捕まっつては、なかなか抜けられない。

お腹の手をそつと引きはがそうとしたとき、低い声がした。
「どこに行くんだ？」

「どうやら光太郎を起こしてしまつたようだ。」

「光太郎様の腕が痺れてしまいますから、少し離れようかと」

命令し慣れた男の声に、里沙はかすかに身を縮めつつ小声で答える。

次の瞬間、里沙の身体は圧倒的な力で後ろから抱きすくめられた。

そして光太郎の手が、里沙の黒いまつすぐな髪を指先で梳く。

「里沙は軽いから大丈夫。このくらいなんでもない」

髪に触れていた光太郎の手が、下に降りてきた。肋骨の辺りを撫でた指は、次に胸の膨らみに伸びる。彼の手が、感触を楽しむように、幾度も胸を揺らす。

一糸まとわぬ姿で、里沙は小さく息を呑んだ。

ベッド脇のライトが、室内を淡く照らし出している。

スプリングの軋む音がして、光太郎の腕が再び里沙を抱きすくめた。

「……なんか、また里沙としたくなつた」

「あ、あの……光太郎様……さつきもしまし……、あ……つ」

身体の前に回つた指が、胸の先端を突く。里沙は思わず声を漏らし、身をくねらせて悪戯な指に抵抗した。

大きな手が、里沙の乳房を優しく、けれど執拗に揉みしだく。

いつしか、腕枕していたもう片方の手が、脚の間に伸びていた。

「……つ、あ、だめ……ッ……」

背中から抱きしめられたまま、里沙は不埒な腕から逃れようともがく。

胸を弄ぶ手が、異様な熱を帯び始めたのを感じる。

下肢に伸ばされた手が、閉じた腿の間に忍び込んだ。

後ろ頭に、キスの感触を感じる。からかうような軽いキスが、次第に執着を帯びた激しいものに変わってゆく。

髪に、耳に……何度も繰り返しキスをしながら、光太郎は里沙の茂みの奥をまさぐつた。

「だめなのか？ 俺に愛されて抱かれるのは、まだ『お仕事』だとも？」

乳房を揺らしていた手に、胸の先端を軽く突かれる。凝つた乳房に触れた刹那、下腹部の奥に痺れが走つた。

里沙の反応に気をよくしたのか、光太郎の手がゆつくりと和毛をかき分ける。

懸命に脚を閉じてても、指の侵入を防げない。大きな手に割り込まれ、蜜口が暴かれた。

「あ、ああ……つ、そこ、触っては……んっ……」

触れられた泉がひくんと震え、思わず甘い声が漏れる。

「どこもかしこも、全身可愛いな。抱くたびにどんどん可愛くなる。怖いくらいだ」
光太郎が里沙の髪に顔を埋め、低い声で呟く。

触れられてますます鋭敏になった乳首を、今度は指で挟まれた。身体が強ばる。
脚の間を攻める指が、ぬかるんだ秘裂にずぶりと沈み込んだ。

「……………う……………」

もう、手を振り払うだけの力もない。

悪戯されるがまま、里沙は懸命に喘ぎ声を呑み込む。

背後に感じる光太郎の身体は、いつしか焼けるように熱くなっていた。

ぐちゅぐちゅという水音が、次第に強くなる。身体の奥から、ぬるい何かがあふれ出すのを感じた。
不意に光太郎が胸から手を離し、枕元の小箱を手取る。そして中から避妊具を取り出した。

「見て、里沙。もう最後の一個だった」

からかうような口調に、獣じみた情欲がにじんでいる。

「俺たち、今まで何回セックスした？」

「あ……………光太郎様、この、手……………ああん……………」

そんなことを問われても、この状態で答えるなど無理だ。光太郎のもう一方の手は、変わらず里沙の中を弄んでいる。閉じた身体を開こうとする指から解放されたくて、里沙は必死で身をよじった。

だが、光太郎はやめてくれない。

長い指が、淫らな音を立てて花褻のあわいを行き来する。

息が弾み、身体中がゾクゾクして何も考えられない。

「俺の健康管理のために、回数をカウントしてくれるんじゃないのか」

「ん……………」

唇を噛み、里沙は必死に考える。

そういえば、毎晩遅くまで起きているのはよくないと思って、そんなことを言った気がする。もちろん不埒な指に弄ばれ、泣かされながら、うわごとのように口走った言葉だけ……………

「教えてくれ。俺は数えてないんだ」

蜜口から、とろりと雫がしたたり落ちた。里沙は息を弾ませ、手元のシーツを握りしめる。

光太郎の指をぎゅっと締め付けながら、半泣きの声で答えた。

「つ……………あ……………もう、分らない……………」

何度も抱き潰された記憶が生々しく蘇り、恥ずかしさに涙がにじむ。

痛いくらい火照った里沙の耳を、光太郎がかぶつと囁んだ。

「やあっ！」

たったそれだけの刺激で、里沙の身体は激しく反応した。視界が涙の膜で曇る。

「もう数えられなくなっただか……………俺もだ。里沙に夢中になりすぎて分からない」

光太郎が満足げに喉を鳴らして続けた。

「俺とセックスするのは慣れたか？」

赤裸々な質問に、身体がかつと火照る。恥ずかしさのあまり、里沙は唇を噛んだ。

からかうような口調ではあるが、里沙が答えるまで、光太郎はひく気がないようだ。里沙は諦めて、声を出さずに小さく頷いた。

「……ならいい。はい、これ持ってる」

光太郎に何かを差し出され、里沙はシーツを掴んでいた手を緩めた。受け取ったのは、最後の一個の避妊具だ。

同時にずりりと音を立てて、指が抜かれる。ほっと身体の力を抜いた刹那、里沙の身体が軽々と反転させられた。

背中から抱きしめられていたのが、正面から抱き合う格好になる。

光太郎の汗ばんだ胸で、里沙の乳房が押し潰された。

里沙の肌を味わうように、光太郎の掌が背中やお尻を撫でまわす。

「柔らかいな、気持ちがいい。ずっと触っていたい」

「あ……」

光太郎はしばらく身体に手を這わせていたが、やがて名残惜しげに手を止め、そっと身体を離れた。

里沙の腰骨に手を掛け、光太郎が耳元で囁く。

「挿れていい？」

光太郎の言葉に、里沙は小さく息を呑んだ。光太郎恋しさに、身体中が熱くなる。

「挿れていいなら、里沙がそれを付けて」

手に、避妊具を握らされたままだったことを思い出す。誘惑に満ちた声に、里沙の身体の奥が疼いた。

「で、でも……光太郎様……」

「嫌か？」

渴きをにじませた声で、光太郎が尋ねる。

昂る肉槍が、下腹部に触れた。

今日まで、何回も光太郎を受け入れてきた。初めのうちは葛藤しながら、そして今では愛おしさで何も考えられなくなりながら……

そしてこの瞬間もまた、里沙は熱に浮かされたように彼の言葉に従おうとしていた。

「……いい、いいえ。嫌じゃ、ない……です……」

息を呑み、お腹の辺りまで反り返っている肉杭に、そっと触れる。

彼に教えてもらったとおりに、避妊具を被せた。不器用な手つきで作業を終えると、光太郎の唇が里沙の唇を塞いだ。

光太郎の舌が里沙の口内をまさぐる。それだけで、脚の間の疼きが耐えがたいものに変わった。舌を舌を絡められ、里沙は懸命に同じ仕草で応える。

ぴったりと肌を合わせて抱き合っていると、光太郎の鼓動がダイレクトに伝わってくる。この前

まで遠い人だった彼が、今、信じられないくらい側にいる。

夢を見ているようだ。

彼の体温を感じると、もっと肌を重ねていたくなる。

「ああ、なんでこんなに可愛いんだ、里沙は……」

唇を離し、かすれた声で光太郎が言った。

仰向けに倒された里沙の身体に、光太郎が覆い被さる。彼は淡い笑みを浮かべて、里沙を優しく組み伏せた。

熱い手が里沙の脚を持ち上げ、大きく開かせる。露わになったそこに、昂った杭の先端が押し付けられた。

これまでどんな風に抱かれたか、どんな風に啼かされたかを思い出し、里沙の恥じらいは頂点に達した。

「里沙は一生、俺だけ知っていればいい。俺に抱かれて、俺のことだけ考えていればいい」

光太郎の薄い色の目には、焼け付くような光が浮かんでいた。

『山風家の若きご当主様』のこんな顔は、今まで知らなかった。もしかしたら里沙以外、誰も知らない顔かもしれない。

そう思うと、恥ずかしさと嬉しさがこみ上げてきた。里沙は小さく頷き、光太郎の食むようなキスを受け止める。その瞬間、濡れそぼった蜜口を、肉の楔が貫いた。

「あ……ああ……」

ただ繋がっただけなのに、身体が震える。

強い快感をやり過ごそうと、里沙はのけぞって顔を傾けた。その拍子に、視界の端に避妊具の空き箱が映った。

初めてそれを使ったときは、怖くてひたすら震えていた。

でも、最後の一個を使っている今、怖くも痛くもない。むしろ、もっと乱して、めちゃくちゃにしてほしいとすら思う。

人間はあつという間に変わるのだな、と思ったとき、光太郎が里沙の顔を己の方に向けさせた。俺に抱かれているのに別のことを考えるな、という意味だろう。

何度目か分からないキスに唇を塞がれながら、里沙は光太郎のさらさらした髪を指で梳いた。

そのまま、汗ばんだ背中に手を回す。滑らかでしっとりとした広い背中を抱いていると、愛しさがこみ上げてくる。

幼い頃から、里沙は光太郎のことが世界一大好きだった。ずっと片思いで、叶うはずのない恋心を抱き続けていたのだ。だから、こうして彼に求められるのなら、何をされても構わないと思えた。

「あ、あん……」

貫かれながら繰り返し首筋にキスをされ、甘ったるい声が漏れる。身体中全部、美味しく食べられているようだ。そう思うと、里沙の受け取る快感はますます強くなった。

「ん……く……」

身体の中をいっぱい満たす剛直を、ぎゅうつと締め上げる。光太郎が小さな声を上げ、里沙の

耳に歯を立てた。

抽送が激しさを増していく。

突き上げられ、揺さぶられながら、里沙は必死で光太郎の背にしがみついた。

「里沙がこんなにエロいなんて知らなかった」

からかうような口調に、里沙は涙ぐんで首を振る。

「やつ……違……つ、あぁつ……！」

焦らすためか、杭が半分ほど引き抜かれた。

「いや、光太郎様、やめないで……」

思わず締め付けられ、光太郎が嬉しそうに言う。

「里沙も俺がほしいのか？」

肩にしがみついたまま、里沙はこくこくと頷いた。

「つ……ほしい……です」

光太郎の手が里沙の膝裏にかかる。ますます大きく脚が開かれ、半ば以上まで抜かれていた楔が、じゅぷじゅぷと音を立てて里沙の中に入れられた。

圧倒的な質量が体内を満たす。奥深いところを押し上げられて、里沙の唇から喘ぎ声がこぼれた。

「光太郎様……あ、あ……つ……」

「里沙、可愛い……里沙……」

力一杯里沙を抱きしめ、光太郎が繰り返し名前を呼ぶ。彼の滑らかな額には、いくつもの汗の玉

が浮いている。

息もできないほどの力で、里沙の身体がシートに押し付けられた。

今までにない激しさと、繰り返し下腹部を貫かれる。

里沙は熱い蜜をしたたらせながら、快感に身を任せた。

「は……つ……あぁ……つ……」

与えられる刺激に、身体中が震え出す。

淫らな蜜音が強まり、啞え込んだ楔が硬さを増す。蜜道をますます押し広げられ、里沙は思わず

腰を揺らした。

「気持ちいいか？」

心なしか光太郎の音が嬉しそうだ。だが、里沙には、頷く余裕もない。

与えられる刺激が強すぎて、ともすれば気が遠くなりそうなのだ。

薄い皮膜越しに熱い光太郎の身体を感じて、下腹部がわななく。

かすかな汗の匂いが、里沙の鼻先をくすぐった。

激しく上下している胸板に、半ば理性を失ったように、繰り返し押し付けられる滑らかな唇。

光太郎の激しい興奮を感じ、里沙もまた、抑えがたい昂りを覚える。愛しさと快感が止めどなく

あふれ、彼自身を呑み込んでいる隘路がひくひくと震えた。

「や、あ……光太郎様の、硬くなって……つ……ん！」

里沙の唇が激しく塞がれる。汗の味がするキスだ。

光太郎は背中に回った里沙の片手を外し、その手をぎゅっと握った。指と指を絡め合い、お互いに力一杯手を繋ぐ。

「好きだ、里沙。俺には里沙しかいないんだ……いい加減、諦めて、理解しろ」
光太郎の声が、艶めかしくかすれた。腰の動きがこれまでになく激しくなる。奥深くを、思いきり抉られた。

同時に、隘路を満たしていたそれがびくびくと弾けて熱を散らしたのを感じる。情欲を吐き尽くしながら、光太郎が繋ぎ合わせた手に力を込める。

里沙は開いた両脚を震わせ、果てた彼の耳の辺りに、頭を擦り付けた。

やはり、好きな人にこんな風に抱かれたら、冷静でなんていられない。

里沙は目を閉じ、光太郎の形のいい耳に囁きかけた。

「私も……」

先を続けようとして、泣きたくなる。そんな短い言葉で表しきれるような感情ではないのに……
荒い息を繰り返していた光太郎が、里沙と繋がったまま、真面目な口調で尋ねる。

「俺が無理強いしているから、そう言ってくれてるわけじゃない……よな？」

その問いに、里沙は素直に頷いた。

「違います、好きです……」

「そうか、よかった。……俺は里沙が好きすぎて、つい暴走するからな」

冗談めかした口調に、里沙は目を瞑ったままちよつと笑う。

好きな人に毎日好きと言ってもらえるこの状況に、嬉しいと思う反面、恐怖も感じる。うとうととしている里沙の傍らに、光太郎が滑り込んできた。

「明日の朝、俺が風呂で洗ってやる」

「な……っ、自分で洗います。俺が洗うって、どうしていつもそんな……だめ……」

小声で抵抗すると、光太郎が優しくクスツと笑った。

「俺は里沙と風呂に入るのが好きなんだ、そのくらい許せ」

里沙を抱き寄せながら、光太郎が最高に機嫌のいい声で言う。

幸せそうな声だ。

光太郎のこんな声を聞いているとほっとする。

彼が笑顔を見せてくれると嬉しい。

なぜなら里沙にとつて一番大事なものは、光太郎だからだ。

もう、光太郎様さえ幸せならそれでいいんじゃないかな……と考えそうになる。

だが長年刻み込まれてきた『使用人の娘とお仕えすべき御曹司様』という感覚はなかなか消えないわけ……

思い出すのはあのパーティの日の光景。輝くシャンデリアの下で光太郎の強引な「命令」を受けた瞬間、里沙の運命は変わったのだ。一体これからどうなるのだろうか。

——今後のことは、今はいい。光太郎様のことだけ考えていたい……

里沙の頭のブレーカーは、そこで落ちた。

須郷里沙、二十四歳。彼氏なし、男性と手をつないだこともない。真面目がとりえの大人しいO
しだ。

日本有数の企業グループである『山風グループ』を統括する、『山風ホールディングス』の秘書
室で働いている。

入社二年目の新米なので、先輩秘書たちの雑用をこなす日々だ。

その日は、いつもと変わらない平和な木曜日だった。

山風ホールディングスがあるのは、都内の一等地。立派なオフィスビルだ。

ビルの中層階には、様々な樹や花を植えた広いガーデンテラスがある。里沙は昼休み、一人でそ
こで息抜きしていることが多かった。

だが今日は、珍しい人が一緒だ。

「光太郎様、どうなさったんですか？ お昼休みに会いに来られるなんて」

「里沙と喋りに来ただけだ。たまにはいいだろう？ 寂しいから、あまり俺を避けるな」

傍らの青年が形のいい口元を緩ませ、里沙をじっと見据える。

山風光太郎——『山風グループ』の創業者一族の御曹司である。セレブとかリッチとかいう次元

を超えた、しんしょうめい正真正銘、本物の貴公子だ。

——相変わらず……光太郎様の笑顔はまぶしすぎる……

光太郎は、名前のとおり光を集めたような、非の打ち所のない容姿をしている。

若干強面だが完璧に整った顔立ち、淡い色の目と髪に、滑らかな肌。長身の鍛え上げられた身体

は、高級なスーツを着ても全く負けない。街を歩くと、道行く人が思わず振り返ってしまうほどだ。

今も、ベンチに座っているだけで、周囲の目を惹きつけている。

——光太郎様がいらつしやると、おまけの私まで目立ってしまう。

内心落ち着かない気持ちを抱えつつ、里沙はつとめて明るく答えた。

「避けてないです」

本当は避けている。里沙は、会社ではなるべく光太郎の側にいないように距離を置いて、顔を合
わせないようにしていた。

社会に出て痛感したからだ。光太郎は見えない線の向こう側にいる、里沙とは違う世界の、本物
の王子様なのだ……と。

「ならいいんだが。社会人になってから、妙に冷たいから気になって」

光太郎が形のいい唇に、涼やかな笑みを浮かべた。

関連な気質の彼は、言葉遣いも歯切れがいい。

だが、その歯切れのよさが、里沙の後ろめたさに拍車を掛ける。

「私……仕事を覚えるので精一杯で……」

言い訳がましい口調になり、里沙は悟られないよう唇の内側を噛む。

里沙の実家、須郷家は、百年以上も前から山風家の筆頭侍従を務める家柄だ。

身分制度が撤廃された現在でも、須郷家の人間は山風グループの重要な役職に就き、山風家に仕え続けている。

里沙も幼い頃から、主君の光太郎に仕えるように育てられた。現在も山風グループの企業で働きつつ、光太郎の役に立つべく頑張っている最中だ。

——それにしても、今日はなんのご用かしら。光太郎様は、確か午後から会議のご予定なのに。光太郎は今、『山風ホールディングス』の経営企画部にいる。

役職は常務取締役で、いずれ『山風グループ』の総帥となるために、研鑽を積んでいるところだ。そんな多忙な光太郎が、昼休みとはいえ『使用人』の里沙相手に油を売っているのだから。里沙は戸惑いつつ、隣に腰を下ろした光太郎を見つめた。

「光太郎様、お昼は召し上がりましたか？」

「ん？ ああ……さつき何か食べた。大丈夫だ、ありがとう」

曖昧な答えが返ってくる。仕事に夢中の光太郎のことだ。秘書に渡されたものをそのまま囓ったに違いない。

——光太郎様、ちゃんと食べたのかな？ 兄さんが側についているから大丈夫だと思っけど……里沙の八つ年上の兄、雄一は、光太郎の第一秘書だ。冷徹な見た目で、性格もその外見どおりクールだが、仕事ぶりは完璧である。あの兄なら、光太郎が昼食を抜くなどというネガティブな行

動をとれば、絶対に見逃さないだろう。

——でも光太郎様、なんだか様子……。どうなさったんだろう、思いつめた顔をなさって。

首をかしげた里沙と目を合わせず、光太郎はまっすぐ前を見たままだ。整いすぎた顔に、かすかに緊張が浮かんでいるように見えた。

やはりちよっと様子がおかしい。訝しく思っていると、光太郎が口を開いた。

「……里沙は、俺のこと好きだよな」

「……はい？」

里沙の目が点になる。

唐突に何を言い出すのだろう。

「いや、……里沙は……里沙は、俺のこと好きだよな。昔から俺のこと大好きって言ってたけど、今も好きだよな？」

光太郎が真剣な顔で里沙を振り返る。鳥肌が立つほど整った顔は、全く笑っていない。

——い、一体、どうなさったの……って、いけない、ちゃんと答えなくては。

我に返って、里沙は張り付けたような笑みを浮かべた。

「はい、好きです。小さな頃から、ずっと光太郎様と一緒に……当たり前です」

答えて、胸がちくりと痛くなる。

『私はずっと前から、貴方に恋していました』

そう言いたい気持ちを呑み込む。

何を聞かれても、答えのテンプレートは決まっている。

正しく距離を取った上で『大好きです』と言う以外の選択肢を、里沙は与えられていない。

里沙の母が山風家の本家屋敷で働いていた関係で、里沙は幼い頃から光太郎と過ごすことが多かった。

光太郎は公明正大な性格で、使用人の娘である里沙のことも、妹のように可愛がってくれた。

里沙は、優秀な光太郎から勉強を教えてもらい、習い事にもちよこちよこついでいき……と、いつも彼にくつついていた。

『お兄ちゃんみたいだけど、お兄ちゃんと違う』

無邪気な好意は、いつしか恋心に変わっていた。こんな素敵な本物の王子様が側にいて、恋しいわけがないのだ。

だがそれは子供の頃の話で、今は違う。

大人になって、自分の立場もわきまえた。光太郎は、里沙が恋している相手ではないのだ。慣れきった『いい子の表情』を浮かべる里沙の前で、光太郎が唐突に立ち上がる。

「分かった、ならいいんだ。じゃあ週末のパーティ準備、よろしくな」

「はい、お任せください」

里沙は頷いた。

今週の土曜日に、山風グループの創立記念パーティがある。

里沙はパーティ運営の裏方に徹する予定だ。

——今年こそ、光太郎様の婚約発表があるかもしれない……。仕方ないよね。光太郎様はもう二十八歳だし、早く身を固めろって皆に言われているんだもの……

無意識に拳を握りながら、それでも里沙はニコニコと空虚な笑みを浮かべる。

自分には関係ない。光太郎がどんなお嬢様と結ばれても、祝福するのみだ。

——落ち込むから、考えちゃダメ。

懸命に笑みを作る里沙に、光太郎が真剣な顔で言う。

「土曜出勤になってしまって申し訳ないな。パーティが終わったあとも、里沙にはいろいろ、頼む……と思うけど、いいか？」

今、不自然に言葉が切れたのは気のせいだろうか……

パーティが終わったあとに一体何を頼まれるのだろう。不思議に思いつつも、里沙は頷いた。「残業ですか？ はい、かしこまりました。なんでもお任せください」

後片付けやお礼状送付なら得意分野だ。胸を張る里沙に、光太郎がようやくいつもの明るい笑みを見せてくれる。

「里沙が驚くようなことを頼むかもしれないけど」

初夏の光に光太郎の色の薄い目が透けて、色硝子の^{ガラス}のようにキラキラと輝く。綺麗な目だなど見れながらも、里沙は頷いた。

「はい、どんなお仕事でもお任せください。光太郎様はどうかご心配なく」

里沙は、周囲の人から何度もやんわりと『光太郎様と必要以上に仲良くしてはいけない』と釘を

刺されてきた。

使用人の娘は分をわきまえ、いつか迎えられる奥様を不快にしないよう、光太郎様から距離を置きなさい……と。

もちろんその言いつけは厳守している。だから今の里沙は、光太郎にどんなに優しくされても社交辞令として受け取り、従順な『他人』として振る舞っているのだ。あんなに可愛がってもらったけれど、その記憶はもう捨てた。

残されたのは、使用人としての矜持^{きんぢ}だけだ。

——私、光太郎様のお役に立ちたい。だから『仕事』だけは頑張ります。急ぎ足で去って行く光太郎の背中を見送りながら、里沙は心の中で呟いた。

そのとき、ふらりと近づいてきた人の気配に里沙は顔を上げる。

——九藤様……

『山嵐ホールディングス』の総務部で働く九藤周吾^{しゅうご}の顔を見上げ、里沙は鉄壁の愛想笑いを浮かべ直した。

「お疲れ、須郷さん。今、光太郎君と何話してたの」

——また困った方に声を掛けられたわ。

ひよろつと痩せた男だが、一六〇センチの里沙よりも十五センチ以上は背が高い。近づいて来た彼の威圧感に、里沙は自然に距離を取る。

「土曜日の創立記念パーティについて、手伝いをよろしく頼むと声を掛けていただきました」

里沙の答えに、九藤が皮肉な笑みを浮かべる。

「へえ……山嵐家の御曹司ともなると、下々の者にも気が利くんだね」

彼は山嵐家と古い付き合いのある『九藤グループ』の御曹司だ。優秀な兄が四人いて、現在二十七歳の彼は一人歳の離れた末っ子である。九藤周吾はグループの要職に就く兄たちと違って、

『親の知り合いの会社で働かされている』現状が気に入らないらしい。

「……いろいろな方面に気を遣われる方なので」

里沙は愛想笑いを浮かべ、更に無難な答えを口にする。

「だから俺なんかもクビにせず雇ってくれてるんだろ？」

——そのとおりです、九藤様。『九藤グループとの取引を有利にする』という理由だけで、雇用され続けているご自覚はありますか？

彼の皮肉な言葉に、里沙は心の中で答えた。

九藤は素行が悪い。彼を「お預かり」する決定打になったのは、どこぞの芸能人がホームパーティの際に違法薬物で摘発されたとき、そこに彼も同席していたという事件だ。

九藤本人が薬を使用していたわけではなかったものの、結構な醜聞^{しゆうぶん}だ。九藤家の両親はスキャンダルを恐れ『ほとぼりが冷めるまで山嵐の会社で預かってくれ』と息子を光太郎の親戚に押し付けたいのだ。

その親戚からねじ込まれた光太郎が、いやいやながらも九藤を預かり、山嵐ホールディングスの総務部で働かせているという経緯がある。

だが、九藤本人はそれを面白く思っていないようだ。

山嵐グループの未来の総帥として着々とキャリアを積む光太郎が目障りらしく、折に触れて『須郷』の娘である里沙に嫌味を言ってくる。

——そういえば、九藤様の従姉の麗子様が、光太郎様とのご縁談に熱心だとか……

彼女は何度光太郎が断つても、親族のコネや仕事関係での脅しのようなことを匂わせつつ、『再検討』を依頼してくると聞いている。

光太郎の縁談は、里沙には関係のない話だ。だから批判する権利も、不快に思う権利もない。だが、もつと光太郎のことを考え、彼を幸せにしてくれるような人はいないのだろうか、とどうしても思ってしまう。

「すみません、私、飲み物を買うので先に失礼しますね」

これ以上気まずい状況はたくさんだと、里沙は立ち上がる。

「総務の男性陣が、須郷さんと合コンしたいって言ってたよ。美人だつて皆目を付けてる」

里沙は目を伏せ、曖昧な笑みを浮かべた。

痩せ型で大人しい容貌の里沙は『御しやすい』と思われるのか、男性に言い寄られることが多い。それが嫌で極力化粧もせず、服装も『もつと可愛い着れば？』と同僚に呆れられるくらい地味にしているのに。

「兄から『社内に出会いを求めるな』と釘を刺されていますので」

雄一は、若手社員の中では『鬼秘書』として知れ渡っている。とにかく仕事ができ、自分にも

他人にもめっちゃ厳しい人物だ……と。

——まあ事実だけ……

社内で色恋絡みのトラブルを起こしたら、兄がなあなあで見逃してくれるわけがない。容赦なくコンプライアンス調査室に持ち込むだろう。もし、嫌がる女性社員に合コンを強要しているなんて話を兄が知ったら……

兄のことを出した途端、九藤が唇を歪めた。

「須郷室長の名前出されちゃ無理は言えないな。またの機会にするよ。あ、そうだ。週末の創立記念パーティ、うちの親とか親戚も、何人か呼ばれてるんだよね」

まだ終わらないのか、と思いつつ、里沙は平静を保って頷く。

「光太郎君のおじいさんも変わった人だよ。さっさと光太郎君の結婚相手を指名して、決めてあげればいいのに。おじいさんに言われたら、光太郎君も逆らえないでしょ。引退したとはいえ、山嵐一族のドンだもんね。……里沙ちゃんは何か聞いている？」

里沙は、九藤の言葉に眉をひそめた。急に名前にちゃん付けなど、一体どうしたのか。馴れなれしくて困惑するし、気持ち悪い。けれど、相手が相手なだけにやめてくれとも言えない。

おそらく九藤は、従姉の縁談がなかなかまとまらないため、里沙に探りを入れていたのだ。妙に距離をつめてきたのも里沙から話を聞き出そうとしてのことかもしれない。だが、そもそも里沙は光太郎の縁談がどうなっているか知らない。そしてたとえ知っていても、部外者に話すわけがない。「いいえ。きつと孫である光太郎様の自由意志に任されているのではないかと」

そう言つて、里沙は深々と頭を下げた。
「失礼します」

翌々日の土曜日。

里沙は朝早くから、都心にある老舗高級ホテルに赴いていた。

今日は『山風グループ』の創立記念パーティ、当日。

——入社前からお手伝いしてきたから、慣れているけど……

須郷家の人間として、山風家の行事には社会人になる前から一通り関わってきた。

里沙は作業項目のチェックリストを見直し、やり忘れたことがないかを確認する。

——あとはお客様がいらつしやるのを待つだけね。

見回せば、花が飾られ、テーブルセティングも済んで、会場は華やかな雰囲気にも包まれている。グループ関連企業や取引先を集めたパーティが始まるまで、あと一時間ほどだ。

パーティ準備は順調だが、里沙は重いため息を抑えきれなかった。

——今日、光太郎様の婚約者が発表されるかも……

直接里沙に何か告げられたわけではない。だが、今回のパーティは今までのそれとは雰囲気が違う気がする。

このところ、光太郎のことを考えるたびに心がチクチクしていた。

光太郎は年頃の御曹司で、キャリアも人格も問題ない。しかも相当の美男子だ。当然、縁談は引

きも切らず、名だたる名家のお嬢様が光太郎の妻にと名乗りを上げているのは知っている。

それに彼は、周囲から強く結婚を望まれている。十年前に山風家の当主夫妻が、大学一年生の光太郎を残して飛行機事故で亡くなったからだ。

亡きご両親のためにも、光太郎には早く身を固めてほしい、そして山風家の地盤をより盤石にしてほしいと、親戚や取引先は願っているのだ。

——これまで何十回もお見合いしてきたみたいだけど、どれもまとまらなかったんだよね。でも……光太郎様も、ついにお相手を決められたのかも。

重苦しい気持ちを隠し、里沙はことさらにキビキビと歩き回った。

視界のはしに、九藤グループの総帥夫妻の姿が見えた。会社でお預かりしている問題児、九藤周吾の両親だ。

二人とも、かなりの高齢である。周吾は、歳がいつて生まれた末息子だから、余計に甘やかさされて育ったのかもしれない。

——今日のご両親だけで、九藤様ご本人は来てないのね。一応うちの会社では平社員だから呼ばれなかったんだろうな。

平社員扱いが周吾のプライドを傷つけていることに、里沙とて気付いている。けれど、実家から腫れ物扱いされ、かといつて山風グループでもまるで成果を出せず……では、誰も優遇のしようがないのだ。

——九藤様のこと考えるのはやめよう。仕事仕事……つと。

仕事の忙しさのお陰で、余計なことを考えずにいられる。

このまま光太郎の婚約発表があったとしても、忙しくしていれば心の痛みを誤魔化せるだろう……

「里沙」

兄の雄一が、里沙を呼び止めた。『鬼上司』である雄一の声に、反射的に背筋が伸びる。

「来客リストをくれ。光太郎様が会場内で直々にご挨拶する方には、蛍光ペンでチェックをするな？」

「はい、大丈夫です。どうぞ」

里沙は手にしたリストをざっと見直してから、雄一に手渡した。

「頂戴したお花の確認は大丈夫か」

「お花をくださった方のリストと現物を突き合わせました。お礼状で、お花の件に触れるようにします」

雄一が無言で頷いて、リストを手に立ち去る。よく見れば、小脇にノートパソコンを抱えていた。相変わらず仕事に追われているようだ。

——乾杯のドリンクは大丈夫かな……。お任せしてるけど、一応確認しておこう。

里沙は、厨房へと足を向けた。

そろそろお客様が会場入りする時間だ。

取引先の偉い人や、山嵐家の親戚の方々がみえるので、失礼があつてはならない。里沙の両親も、

朝から会場入りして走り回っている。

山嵐グループの企業重役を務める父は、早くに到着した遠方のお客様の対応中だ。山嵐家の裏方を取り仕切る母は、お客様を迎えるにあたり粗相がないか、パーティ会場の従業員と最終打ち合わせをしている。

ドリンクのチェックを終え、里沙は一度足を止めた。

——受付開始前に、ちよつとメイクを直さなきゃ……

化粧室へ行き、身だしなみの最終確認をする。

——さて、私は隅っこでお客様の様子を注視しつつ、何かあつたら参じる、と。

そうして里沙は、エントランスロビーの片隅に立った。

三々五々、華やかな格好の来客が集まってくる。グループの役員たちが来客を出迎え、談笑を始めた。

里沙は、荷物を手に立っているお客様にはクロークを案内し、ラウンジに着席されたお客様にはすぐに飲み物が運ばれるよう目を配り——と、黒衣に徹して会場内を歩き回った。

時間となり、メイン会場が開く。来賓が続々と会場へ吸い込まれていく。

あとはトラブルがない限り、進行を見守るだけだ。

——これから社長と来賓と、それから山嵐家代表として光太郎様のスピーチがあつて……。多分、光太郎様のスピーチで、アレがあるんだろうな。

里沙はかすかに表情を翳らせる。

今日のパーティには、日本でも指折りの名家が揃っている。古くから山嵐家が取引していたり、家同士の交流があったりという、いわゆる『上流階級』の人々がたくさん来ているのだ。

彼らにとつては、『山嵐グループ』オーナー一族の御曹司の動向は、とても気になるものだろう。光太郎の打ち出した方針で、自分たちの今後が変わる可能性があるからだ。それゆえ光太郎の縁談も、当然注目的である。

なんとなく、会場全体がそわそわしている気がする。誰もが、光太郎の婚約発表が今日行われることを期待しているかのようだ。

でも里沙は、光太郎の口から『婚約のご報告』なんて聞きたくなかった。さりげない仕草で、腕時計に目を落とす。この時間、里沙のスケジュールは『空き』となつている。パーティ当日でも交代で休めるようにと、雄一が組んだものだ。

——今から一時間休憩ね。おにぎりでも食べておこうかな。今日はこのあとますます忙しい……

そう思いながらそつと会場をあとにし、運営側の控え室へ向かった。

——何を話すんだろう……スピーチ……

誰もいない場所で黙々と持参したおにぎりを食べていたら、目に涙がにじんだ。

今ごろ、婚約発表が行われているのだろうか。胸が痛くてたまらない。

現実逃避するように、里沙は一度ぎゅつと目をつぶった。

——五時起きだったから、ちよつとだけ仮眠しようかな。十五分だけ……

おにぎりを食べ終えて一息ついた里沙は、パイプ椅子の背もたれに寄りかかった。

昨日はあまり眠れなかった。今日も朝からずつと気を張っていたため、とても疲れている。スマートフォンをバイブレーションでセットし、目を瞑った。

あつという間に意識が途切れる。

そして、寝苦しい格好のせいかな、変な夢を見てしまった。

——ああ、これって……あの日の夢だ……

里沙は中学校の制服姿だ。

十四歳の里沙は、光太郎を探して、山嵐家の屋敷を必死に走り回っていた。

悲しみに沈む広い館は、空気が淀んでいる。

先日、飛行機事故で亡くなった光太郎の両親の、葬儀が終わった。もうこの家に、二人の明るい笑い声が響くことはない。

——あ、もしかして！ あつちにいるかも。

里沙は光太郎がいそうな場所を思い付いて、慌てて二階に走った。廊下の突き当たりの広いバルコニーに向かう。

そこは、光太郎の母が鉢植えの薔薇を育てていた場所だ。日差しの管理が難しい種類だからと、庭に植えずに、ここで日々大事に手入れしていた。

そつと様子をうかがうと、光太郎の背中が見えた。

鉢の前にかがみ込んでいる。

しばし躊躇^{ためら}ったあと、里沙は後ろ手に袋を隠し、足を進めた。

「光太郎様……」

薔薇^{ばら}のつぼみを摘^つんでいた光太郎が振り返る。

整った顔はやつれ、青ざめていたが、それでも彼は里沙を見て優しく笑ってくれた。

「どうした、里沙」

笑顔を見せてくれたことにほっとして、里沙はおずおずと彼に近づき、傍^{かたわ}らにしゃがみ込む。

「何をなさってるんですか？」

「新芽のつぼみを取ってる。まだ株が若くて、全部咲かせると弱るんだ。母さんが旅行に出る前に家政婦さんに頼んでいったんだけど……。こんなことになって、皆、花の世話どころじゃないみたいだから」

里沙の胸がずきんと痛む。

涙をにじませた里沙は、慌てて目元を拭^{ぬぐ}って立ち上がり、光太郎の目の前に袋を差し出した。

「あの……おやつを買ってきました」

里沙の言葉に、光太郎が形のいい目を見開き、ゆっくりと立ち上がる。

二十センチ以上背の高い彼を、里沙は思わず見上げる。アッシュブラウンのほんのり明るい髪色に、同じ色の水晶のような瞳。悲しみに沈んでいてすらも、光太郎はキラキラと輝いて見える。

つい見入ってしまったが、里沙は光太郎の美しい顔に疲れがにじんでいることに気付く。

いつも活力にあふれ明るい光太郎が、こんなに青い顔をしているのは見たことがない。

「何か召し上がってください。えっと……コーヒート、オレンジジュースと、お茶と、水と……」

里沙は慌てて袋から飲み物を出した。

次から次へと、バルコニーのテーブルセットの上を買ってきたものを並べる。

たくさん買い物をして、今月のお小遣いの半分くらい使ってしまった。光太郎が何なら口にしてくれるか分からず、ついいろいろと買ったのだ。

「どうしてこんなに買ってきたんだ」

そう言っ、光太郎が笑う。里沙は袋から続けていろいろな食べ物を取り出しながら、できるだけ明るい笑顔で答えた。

「お腹空いていらっしやるかなって」

里沙の答えに、光太郎が笑ったままかすかに目を伏せる。しなやかな腕が伸び、里沙の頭をポンと叩いた。

「ありがとう」

澄んだ茶色の目には、隠しようのない苦しみがはつきりと浮かんでいる。

当たり前だ。ついこの間まで元気だった両親が、今はもうこの世にいないのだから。

親孝行な光太郎は、いま、どれだけ傷ついているのだろう。

さつき頑張っ引つ込めた涙が再びあふれそうになる。

——私は泣いちゃだめ……。泣きたいのは光太郎様なんだから。

突然、光太郎が里沙の頭を引き寄せた。

里沙の頭が、光太郎の胸に抱え込まれる。耳に、光太郎の声が届いた。

「俺の代わりに泣いてくれるのか？」

——ごめんなさい、私が泣いたりして。光太郎様、私はずっと光太郎様のお側にいます。光太郎様がまた笑顔になれるようにお伝えします……

声にならない忠誠の気持ちは、光太郎には伝わったようだ。

「ありがとう。いつも心配してくれて……。俺のことをこんなに気に掛けてくれるの、里沙だけだ。俺の方が年上で、里沙を心配してやらなきゃだめな立場なのにな」

光太郎の腕の中で里沙は小さく首を振る。

——どんなときも、いつも光太郎様のお側にいる。あの頃はその願いが叶うと思ってた……馬鹿だな、私。

不意に自嘲的な気持ちがあわき上がる。

そのとき、兄の声が頭の上から降ってきた。

「里沙」

仕事の指示かな？　と思つた瞬間、パチツと目が覚めた。膝の上でスマートフォンが震えている。

「大丈夫か？　疲れたのか」

瞬きすると、隙のないスーツ姿の雄一が目に飛び込んできた。

短い時間だが、ぐっすり寝ていたようだ。

「あつ……ごめんなさい。大丈夫。うとうとしてただけ」

里沙はアラームを止め、目を擦って雄一に笑いかけた。里沙の様子を一瞥し、雄一は頷いた。

「大丈夫なら、会場に来てくれ。もうすぐ光太郎様のスピーチが始まる」

その言葉に、里沙の身体がわずかに強ばる。

「それって、私も聞かなきゃだめ？」

もしかして、光太郎の婚約発表が始まるのだろうか。

怯む里沙に、雄一がはっきりと頷いた。

「ああ、だめだ。顔を出してもらわないと」

「どうして？　私に関係ないでしょう……今日は忙しいから、今のうちにもう少しここで休んでよ
うかって……」

思わず反論する里沙の肩に、兄の大きな手がのせられた。

「里沙」

真剣な声に、里沙は雄一を見上げる。

「これから、何も逆らわず、光太郎様の言うとおりにしろ」

その真面目な声に、里沙の心臓がどくと音を立てる。

「兄さん……何を……」

顔を強ばらせた里沙に、雄一が微笑みかけた。滅多に見られない兄の笑顔に、里沙は目を丸くする。

「本当ならもつと綺麗な格好をさせたかったんだが……すまん。さ、行くぞ」
なぜ雄一は謝るのだろう。

事態についていけないまま、引きずられるようにして歩き出す。

雄一は里沙の腕を引き、足早に大広間に向かった。

不安でたまらない。今から何が起きるのだろう。思わず胸を押さえた里沙の前で、雄一が大広間の扉を開ける。

「光太郎様、連れて参りました」

雄一の声と同時に、会場に集まっていた人々の視線が、一斉に里沙の方を向く。

——光太郎様……！

目に飛び込んできた光太郎の姿に、里沙の心臓が大きく跳ねる。

艶やかな髪をきっちり整え、上質なスーツに鍛え上げた身体を包んだ彼は、いつにも増して男らしくかった。

自分の状況も忘れ、里沙は彼の姿に見入ってしまった。

どんなにたくさんの人がいても、光太郎だけが輝いて見える。

それは、彼の美しさゆえなのか、里沙が彼に惹かれているからなのか——

吸い寄せられるように光太郎を見つめていた里沙だったが、次の瞬間身体を硬くした。

光太郎が、自分の方にもつすぐ歩いてきたからだ。

——え、なぜこちらに？

光太郎はもう目の前に迫っている。

反射的に後ずさった里沙は、目の前に立った光太郎に手を取られた。至近距離で、光太郎が微笑む。

息が止まるくらい、華やかな笑みだ。

ドキドキいつていた里沙の心臓が、ますます早鐘を打つ。

「里沙、姿勢を正せ。お前の振る舞いで光太郎様に恥をかかせるな」

背後から雄一の小声の叱責が飛んできた。里沙の足の震えが止まる。

——そ、そうだ、光太郎様のお側にいるときは、きちんとしなければ……

幼い頃から叩き込まれている『人前で恥ずかしくない振る舞い』が、里沙の中に蘇る。慌てて姿勢を正し、可能な限り顔から動揺を消した。

光太郎に手を取られたまま、里沙は必死で意識を全身にもっていき、堂々と見えるように歩く。何が起きているのだろう。

戸惑う里沙の肩を、光太郎の手が抱き寄せる。

——光太郎様、何を……

驚いて彼の顔を見上げたとき、光太郎が晴れやかな顔で、そしてはっきりとした口調で宣言した。「ご紹介します。彼女が私の婚約者の、須郷里沙です。今日から一緒に暮らして、近いうちに籍を入れる予定です」

光太郎と身を寄せ合ったまま、里沙は凍りつく。

——待つて、これはどうということなの……!

頭が真っ白になっている里沙の耳元で、光太郎が囁く。

「いいよな、里沙。頼むぞ」

甘く、低く響く声に、里沙は反射的に頷いた。そのまま声を潜め、尋ねる。

「は、はい、かしこまりました。ですが、私は何をすれば……?」

「今言ったとおり、今日から里沙は俺の婚約者だ」

光太郎の幸福そうな笑顔は、愛する恋人を見る若い男性の表情そのものだ。困惑が抑えられない。いつから光太郎は、こんなに演技派になったのだろうか?

だがさすがに、『婚約者』は……。あまりに突拍子もない発言に、今度は頷くことはできなかった。

当惑する里沙に、光太郎が再び囁きかける。

「今から俺の婚約者になつてくれ。頼みたいことはそれだけだ」

艶やかな声が里沙の肌を震わせる。こんな場面なのに、里沙の胸が一瞬高鳴った。

だがこの状況で余計なことはいえない。周囲から不審に思われる仕草はだめだ。光太郎にだけ分かるようにかすかに眉をひそめると、それに気付いた彼が視線で立ち並ぶ人々を示した。

「客の面子を見てみる」

里沙は礼儀正しい笑みを浮かべつつ、辺りに目を走らせる。

——古くからお付き合いのあるお家に、山嵐グループに投資している銀行の方……。あちらは

京都から見えた山嵐グループの大株主で……

胸の谷間を、つうつと汗が伝った。

どの来賓をとつても、超VIPばかりだ。彼らの前で冗談で婚約発表するなんて、許されるものではない。

「彼らは、お前を俺の婚約者と認識した。これは決定事項だ。分かったな?」

光太郎の色の薄い瞳が、里沙を見据える。訳が分からないまま、里沙は慌てて頷いた。

ここで里沙が騒げば、光太郎の顔に泥を塗ることになる。いくら焦っていても、それだけははっきりと理解できた。

周囲は、未だに驚いたように里沙と光太郎を見つめている。

来賓だけではない、会社の上司も里沙の両親も……兄以外の人は、ぼかんと口を開けて里沙を見ていた。

何が起きたのだろうかという顔だ。

彼らと同様に状況が理解できず、とにかく懸命に平静を装う努力をし続ける里沙の耳に、ほどなくしてまばらな拍手が届いた。やがてその拍手は大きくなり、会場中に響き渡っていく。山嵐家の御曹司自らの婚約発表に、表立って異を唱える人間はいないようだ。

里沙は必死で張り付けたような笑みを浮かべ、精一杯上品な動作を心がける。

光太郎に恥をかかせてはいけない。突然のこととはいえ、彼の選んだ『婚約者』としてしっかりと振る舞わなければ……

——このままでは、私、本物の婚約者になつてしまう……のでは……？
不安を覚えつつ、里沙は心の動揺を必死に押し隠し、社交的な笑顔を保ち続けた。

パーティが終わり、自宅に戻った里沙の前で、父が苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「公的な場であのような宣言をされては仕方がない……。今更『違います、間違いです』と騒いだところで、光太郎様の立場が悪くなるだけだ。お前は当面は光太郎様と同居して婚約者として振る舞い、話のつじつまを合わせてくれ」

常に『山風家の体面保持が絶対、山風家に降りかかるトラブルは全力で阻止』がモットーの父が、朝会ったときよりやつれて見える。

無理もない。娘が、なぜか『御曹司様』の婚約者として勝手に紹介されたのだから。

光太郎は、里沙の両親に婚約の許可すら取っていないかつたらしい。

否、許可を取ったところで、忠義の塊かたまりのような父が、身分違いの結婚に『YES』と言うわけがないのだが。

光太郎のこの結婚話は、どこまで本気なのか……

とにかく、訳が分からない。

「あの、お父さん」

光太郎様と同居しろつて言われても困るんだけど。そう言いかけた里沙に、父が沈痛な面持ちで告げる。

「状況が落ち着くまでは、お前がすべきことは婚約者として振る舞うということのみ。あとは……父さんがなんとかする……できる……と思う……多分……」

「後半微妙に頼りないんだけど!?」

「と、とにかく、表向きは光太郎様に合わせてくれ。ああ、なんでこんなことになったんだ。雄一に連絡を取らなければ……」

普段淡々としている父が、動揺を隠せない様子で家の奥へ入っていく。

あんな正式な席で発表した婚約を『嘘でした。冗談です』なんて即日撤回したら、山風光太郎は頭がおかしいのでは、と周囲に思われてしまう。

そんな事態は絶対に避けなくてはならない。

父は『勝手な婚約発表事件』をフォローしつつ、現実を修正するために頑張ってくれらしい。

——そ、そうよね、須郷すごう家は山風家の第一の忠臣として代々お仕えしていたわけだし。だから厚待遇を受けて、山風家の皆様からの信頼も得ていて……

だからといって、主人が使用人の娘を勝手に嫁にしているのだろうか。

分からない。頭がぐるぐるしてきた。

とりあえず光太郎が言い放った『今日から同居する』発言のつじつま合わせのために、光太郎が最近購入したというマンションに向かわねばならない。

そこで婚約者と同居する……という設定らしいからだ。

山風本家のお屋敷は、都内の高級住宅街にある。塀の外からはお屋敷が見えないほどに敷地が広

い、大邸宅だ。幼い頃から何度も通ったけれど、里沙はあれ以上に広い個人の家を見たことがない。だが光太郎はその広いお屋敷ではなく、新しく購入したマンションで暮らす気がいいのだ。

——お手伝いさんもないのに、大丈夫なのか……

里沙は出張用のカートの中に、最低限の着替えと身の回りの品を詰め込んだ。普段の出張に行くのと変わらない荷物だ。

——傍から見て、同居しているようであればいいんだものね。それなら、光太郎様には今までどおり本家屋敷に住んでいただいて、私だけ新居で暮らして、二人で住んでいる風を装えばいいかな。というか、今、光太郎様はどこにいらっしゃる？ お電話も通じないし。

何度もスマートフォンを確認しつつ、里沙は準備のできたカートを引きずって家を出た。

須郷家の娘として今回の尻拭いには参加するが、もつと詳しく今回の件を説明してもらわねば困る。

とぼとぼ歩く里沙のバッグの中で、スマートフォンが鳴った。ディスプレイには『兄』と表示されている。

慌てて電話を取ると、雄一の落ち着き払った声が聞こえた。

『ああ、里沙か。光太郎様の購入されたマンションの住所は分かるか』

『兄さん……あの……なんなの、これ……私どうすればいいの？』

恨めしげな声の里沙に、兄が淡々と答える。

『婚約者として振る舞えばいい。そう指示されたはずだ』

「そ、そんなの困る……」

『……お前にしかできない仕事だぞ』

雄一の発した『仕事』という言葉に、里沙の頭がスツと冷える。

「えっ……これ、仕事……なの？」

『うちは昔から、山嵐家のためにいろいろな仕事を引き受けている。それが会社の仕事だけでないことは知っているだろう。他家とのトラブル解決や、スキャンダルの防止、山嵐家の方々のご相談に乗ること……。全部俺たち須郷家の人間の仕事のはずだが』

兄のクールな物言いに、里沙もどんだん冷静になっていく。

「そう……だね。でも、急でびっくりしたの。事前に説明もなかったし」

『光太郎様はしつこい求婚に悩んでおられる。縁談をこれ以上打診されると、精神的に参ってしまいうそこのことだ。だから、お前がお助けしろ』

雄一の声から、『余計なことは一切言わず、素直にハイと言え』というオーラがびしびしと伝わってくる。困惑しつつ、それでも里沙は尋ねた。

「あ、じゃあ光太郎様、お見合いが多すぎてお嫌になったってこと？」

『ああ。だからお前が光太郎様の相手として、婚約者の席に座っている。そうすれば、光太郎様は落ち着かれる』

なんとなく分かった。

里沙が婚約者のフリをすることで、光太郎はわずらわしい縁談にこれ以上振り回されずに済むの

だ。そうして落ち着かせた状況下で、光太郎にお見合い疲れを癒やしてもらおうという算段らしい。「分かったけど……いいのかな、そんな嘘ついて」

『光太郎様に聞け。俺が須郷家の人間としてお前に言えるのは……光太郎様の利益になるのだから、真面目に務めるということだけだ』

兄の厳しい口調に、里沙は思わず姿勢を正した。

「わ、分かりました」

時代錯誤と言われるかもしれないが、須郷家の人間は、山嵐家のために危ない橋を渡ることもある。

そういった忠誠を尽くすことで、破格の厚遇と社会的地位を得ているのだ。それが『侍従長』の家柄というものと、里沙は理解している。

だから里沙も、山嵐家のためであればなりふり構わず働かねばならない。

『分かったなら、新居のマンションに向かい、掃除をして光太郎様をお迎えする準備しておくように』

「はい。……婚約者役を頑張って勤め上げろということよね？」

『先ほども言ったが、詳細は光太郎様に聞け』

兄の答えは、相変わらずにべもない。里沙はため息をついた。

「分かりました。光太郎様をご安心できるように、婚約者役を務めます！ 詳細は光太郎様にうかがいますね」

電話を切ってしばらくすると、じわじわと不思議なやる気がわいてきた。

突然の婚約者指名にびっくりして思考停止していたが……これは、須郷家の娘にしかできない仕事だ。

——だったら頑張るしかない。他ならぬ光太郎様のお願いなんだし。

気を引き締めた里沙がカートを引きずりながら歩いていると、再び電話が鳴る。

慌てて電話を取り出すと、親戚のおばさんからメールが来ていた。

『光太郎様のお嫁さんになるんだって？ こっちの親戚は皆びっくりしています！すごいね、玉の輿おめでとう』

一瞬意識が遠のきそうになる。

あれだけ派手に発表されれば、電光石火で周囲に伝わることを忘れていた。というより考えたくなかった。

そもそも、光太郎の電撃婚約発表は、見方によってはド派手なシンデレラストoryだ。

使用人の娘が、美貌の御曹司の妻になる、身分差ときめき恋物語……に見えなくもないからだ。

噂とテレビドラマが大好きな親戚のおばさんたちが騒がないわけがない。

——うーん……大きな話になってしまったような……

この仕事が終わったら、自分はもうなるのだろうか。『御曹司に捨てられた女』というレッテルを貼られて一生終わるのだろうか。

一瞬不安になったが、里沙はすぐにそれを打ち消した。

光太郎が、里沙をそんな立場で放り出すはずがない。きっと、うまい手立てを考えてくれるはずだ。

そんな心配より、まずは仕事を頑張ろう。光太郎の役に立てるなら里沙も嬉しい。幼い頃から『山風家のために努力しなさい』と教えられて育ったせいかな、光太郎の力になれると思つと胸が弾む。

——大丈夫よ、ちゃんとできる。私が頑張れば、光太郎様が助かるみたいだし。

里沙は気合を入れて、教えられた住所に向かった。たどり着いた先は、都心の超高級エリアだった。瀟洒な七階建てのマンションを見つめ、里沙は思わず開けてしまった口を慌てて閉じる。

——すごい家……。さすが山風家の御曹司様のセカンドハウス。外側からは建物内の様子がうかがえないよう、巧みに設計されている。

駐車場には高級外車ばかり。エントランスの扉には汚れ一つなく、天井も高く、まるで海外の高級ホテルのようだ。

里沙は父から預かった鍵で、エントランスのロックを解除する。

あまりに豪華なマンションなので、入るだけで緊張してしまう。フロントのコンシェルジュに頭を下げ、エレベーターで六階に向かった。

公園に面した角部屋が光太郎の家だという。

「失礼いたします」

誰もいないのは分かっていたが、里沙は挨拶をして、そつと家にかかる。

脱いだ里沙の靴は、美しい大理石の上でみすぼらしく見えた。

目立たない場所に靴を揃え直し、廊下を歩いて中へ進む。どうやらその先が居間のようだ。

——広い……。家具も何もかも新しく、モデルルームみたい。

どの家具も、山風家のお屋敷で見かけたような重厚感ある上質なもののばかりだ。

里沙からすれば別世界だが、極上の品に囲まれて育った光太郎にとっては「なじみのある落ち着いた雰囲気」に違いない。

里沙は腕まくりをして辺りを見回す。今のところ掃除の必要はなさそうだが、この先はそうではない。まずは掃除用具を確認しなくては。

——あつ……。懐かしい……！

いろいろ考えつつ周囲を見ていた里沙は、リビングボードに飾られたトロフィーに気付いた。高校の空手の大会で、光太郎が優勝したときのものだ。里沙と雄一と光太郎、三人で空手を習っていた。ちなみに里沙は、須郷家の人間はいざというときに山風家の方々を護れるようにと、幼い頃から続けてきたので、それなりの腕前だ。

光太郎は、高校を卒業するまで空手を続けていた。

トロフィーの下に置かれた写真立てには、空手着でトロフィーを掲げている光太郎の姿が収まっている。

隣に立っているのは里沙だ。応援に行き、一緒に写真を撮ってもらったのを覚えている。

写真の中の光太郎は、確か高校二年生。かすかに幼さが残っているけれど、やはり今と変わらずにずば抜けて格好いい。傍らの里沙は中学生だ。無邪気な笑顔でピースサインをしている。

——なんで私と写ってる写真……？

一瞬動揺したが、プロフィールと写っているのがこれしかなかったのだろうと思ひ至る。

——光太郎様は、今でも空手がお好きなのかな。

光太郎は、大学生生活が勉強にインターンにと忙しく、空手を辞めてしまった。

——すごく強くて格好よかったのに……勿体ない。でも仕方ないか、忙しすぎる方だし。

そのまま部屋の中を確認し、掃除道具がないことをチェックした里沙は、まずは一通り買ってくることにした。

きびすを返そうとしたとき、不意に玄関に人の気配を感じる。

誰だろう……？と思つた里沙の耳に、大きな言い合いの声飛び込んできて、思わず飛び上がりそうになった。

「勝手をしておつて馬鹿もんが！ 須郷に聞いたぞ。今回の婚約の件、須郷の許可を得ていないとはどういうことだっ！」

聞き慣れた山嵐家の大旦那……光太郎の祖父、隆太郎の声だ。

——嘘……大旦那様がお見えなの……？

その迫力の怒声に、里沙は凍りつく。

「おじいさまには関係ありません。これしか方法がなかっただけです。俺と里沙はうまくやります

から、どうぞご心配なく」

隆太郎に負けず劣らずな迫力の、光太郎の大声も聞こえてくる。

——大旦那様と光太郎様が、また喧嘩していらっしやる！

里沙は慌てて玄関に走った。

玄関には、光太郎と雄一、それから光太郎の祖父である隆太郎と、その従者らしきスーツの男性たちがいた。

隆太郎は杖を光太郎に突きつけ、鬼の形相をしている。

一方の光太郎は、祖父の怒りにもまるで怯まず、彫像のように佇んだままだ。

屋敷では何度も見かけた祖父と孫の大喧嘩だが、今日はひとときわ激しい。

隆太郎が、反抗的な顔の光太郎を厳しい声で叱責する。

「結婚をなんだと思ってるんだ、この馬鹿もんが！ 青二才に偉そうな口を利かれる覚えは……お
お里沙か、こんばんは」

だが里沙に気付いた途端、仁王のような顔をしていた隆太郎は、別人のような笑みを浮かべた。

「こ、こんばんは……大旦那様、それから、お帰りなさいませ、光太郎様……」

「ただいま、里沙」

スーツ姿の光太郎が腕組みをしたまま低い声で答えた。

相変わらずどこにいても華やかで目を引くが、全身に不機嫌のオーラをまとつた光太郎は、正直怖い。怒っている美形は迫力がありすぎる。

「いやいや、すまなかった、里沙。ちよつとこの阿呆あほうを説教していたもんで、大声を出してしまつてな」

困惑する里沙をフオローするように、隆太郎が優しい声で言った。

「いいえ。大旦那様、お身体の方は大丈夫ですか？」

この興奮が障つては、と里沙は慌てて尋ねる。

十年前、光太郎の両親の葬儀が終わつてすぐ、隆太郎は心筋梗塞しんきんこうそくの発作を起こした。後を任せるはずの息子夫婦を突然失つたショックのせいだろう。

一命は取り留めたものの、回復には長い時間がかかり、それを機に彼は経営の一線から退しりぞいた。

そして、今日のパーティも欠席していた。

心臓が、現在もあまりよくないのは事実だ。

興奮しすぎて体調を崩されては……と心配する里沙に、隆太郎は笑顔を向ける。

「里沙はいくつになつた？」

「に、二十四です」

「そうか……私が結婚したのも二十四のときだ。懐かしい、……里沙は、うちのばあさんの次にべっぴんだな」

機嫌のいい表情だ。どうやら、里沙の顔を見て怒りが少し収まつたらしい。

「小さい頃と変わらず目がぱっちりしていいいな。賢そうで、うん。里沙、お前はばあさんの次に可愛らしい」

隆太郎は、ことあるごとに亡き愛妻の話をする。彼が『ばあさんの次に美人』というのは、実は相当な褒め言葉なのだ。

「ありがとうございます、大奥様の次だなんて……恐縮です」

里沙の言葉に、隆太郎が嬉しそうな顔になる。

光太郎の亡き祖母……佳世子かよこは、隆太郎より七つ年上だった。

隆太郎のお見合い相手の姉で、離縁されて家に戻っていたところを隆太郎が見初めみそめ、熱烈にアプローチした末に妻に迎えたのだという。

思えば、隆太郎も光太郎も情熱的で何事にも一途で、非常にパワフルな男性だ。二人は気性も顔立ちも、面白いくらいよく似ている。亡き光太郎の父は、温厚な大奥様に生き写しだったのに……代を超えて、隆太郎の熱く男らしい血は、光太郎に受け継がれたのだろう。

隆太郎は里沙の頭を大きな手で撫で、不意に表情を険しくして、光太郎に視線を向けた。

「……で、お前は今回の茶番で、里沙になんの無理強むりこわいをするつもりだ」

かつて山嵐グループの鬼と呼ばれていた隆太郎は、老いて弱つたとはいえ、今でも相当な迫力だ。玄関に立つ人たちの間に緊張が走る。

「光太郎にもいろいろな考えがあるだろうことは、一応分かった。だが、そのために里沙を利用するとはどういうことだ」

隆太郎の声に、光太郎は眉根を寄せる。

「俺は里沙を利用するわけではありません」

「利用しとるじゃないか。里沙は、お前の無理難題を断れん立場だぞ。こんな若い娘が、いいように使われて可哀相に」

「どうやら隆太郎は、今日のパーティの婚約報告を受け、ひと言もの申しに顔を出したらしい。もしかしたら、里沙の父が『娘が光太郎様の妙な企みに巻き込まれて……』と泣きついたのかもしれない。」

困り果て、里沙は無言で光太郎の顔を見つめる。

「いいえ。利用するつもりはありません」

頑固な口調で光太郎が繰り返す。

「お前は結婚をなめている。こんな勝手なやり方で話を進めるなど言語道断だ」

——光太郎様、婚約の件は『フリ』です、つて早めに申し上げた方が……

申し訳なくなつて俯いた里沙の耳に、光太郎のきつぱりした声が届く。

「いいえ、甘く見ていません。適当に選んだわけでもありません。少なくとも俺の方には、愛はあります」

光太郎は一步も譲らぬ構えだ。だが『愛はある』なんて大見得を切ってしまったって大丈夫なのだろうか。

「……ほう。ならば、里沙と二人、私が認めるような夫婦になつてみせると申すか？」

「はい」

——だめです光太郎様、その論理展開だと、本当に結婚することになつてしまいます……

売り言葉に買い言葉ではないか、とハラハラする里沙の前で、隆太郎が杖を持ち上げ、その先を光太郎に向けた。

「大きく出たな。あとから破綻しましたと泣きついてきても知らんからな。おなごの人生を背負うことを甘く見るな」

「ですから、甘く見てなんかいません。俺は本気です。里沙に『一緒になつてよかった』と言わせてみせます」

光太郎の言葉を、隆太郎が鼻で笑う。

「お前のような青二才の本気など、片腹痛いわ」

「なんとでも仰ってください。里沙と俺は、ちゃんと、仲良くやつていきますので」

光太郎は何を言っているのだろう。里沙は不安で胸が苦しくなる。

——嘘はよくないです、光太郎様。初めから『婚約はフリです』と言つておくべき……です……しかし里沙に、にらみ合う二人の間に割つて入る勇氣はない。

「ふん。そこまで言うなら、いったんは耳を貸してやる。半年後、お前たちが本当の夫婦となつていたら、今回の話を認めてやろう。もちろん、籍を入れたら本当の夫婦だなどと、くだらぬことを申すなよ。二人で本当の夫婦となつておれば、私に報告にこい。ただし何をもって本当の夫婦というのか、きちんと考えてこい。生半可な答えではだめだ。……あまり私を甘く見るなよ」

容赦のない、厳しい声だった。

里沙の背中に汗がにじむ。